

第 6 8 5 回

九州朝日放送番組審議会議事録

—— 2 0 2 6 年 7 月 度 ——

◇ 議題

＜ディスカッション＞

生成 AI・SNS 時代におけるテレビの「価値と責任」

～革新技術とどう向き合うか～

＜＜系列 24 社放送番組審議会委員代表者会議 議題＞＞

◇ その他

2 0 2 6 年 7 月 1 3 日（月）開催

九州朝日放送株式会社

第685回 番組審議会議事録

1. 開催年月日 2026年7月13日(月) 15時30分～17時20分

2. 開催場所 九州朝日放送 本社7階A会議室

3. 委員の出席

委員総数 8名

出席委員数 8名

委員長

山根 久資

副委員長

森 慎二

委員

副田 智幸

委員

サーズ 恵美子

委員

小柳 美佳

委員

林田 真心子

委員

松瀬 萌々香

委員

菊池 文隆

欠席委員数 0名

放送事業者側出席者名

代表取締役社長

森 君夫

執行役員 総合編成局長

大保 一

執行役員 報道制作局・ニュースDX改革推進担当

泗水 康信

広報室長

原 由美子

報道制作局長

川崎 浩司

KBCグループホールディングス(株) 経営管理本部

大塚 正浩

総合編成局 セレクション兼 番組審議会事務局長

加藤 恭子

番組審議会事務局(総合編成局)

松永 俊郎

4. 議題

(1) ディスカッション

生成 AI・SNS 時代におけるテレビの「価値と責任」～革新技術とどう向き合うか～
〈〈系列 24 社放送番組審議会委員代表者会議 議題〉〉

(2) 7 月・8 月 ラジオ・テレビ番組編成状況の報告

(3) 6 月 視聴者・聴取者応答状況の報告

(4) その他

5. 議事の概要

生成 AI の急速な普及や、SNS 上でのフェイクニュース・誤情報の拡散が社会問題となっている。こうした「AI・SNS 時代」において、テレビメディアは新しい技術をどう受け入れ、どのような責任を果たすべきなのか。以下の三つの論点から、テレビの「価値」と「進むべき道」について議論を深めた。

論点 1：AI・新技術の活用と「放送のクオリティ・安心感」

論点 2：SNS 時代のフェイク情報と「テレビの信頼性・責任」

論点 3：AI・SNS 時代における「ローカル局（KBC）の存在意義」

委員の意見（概要）

「論点 1」について委員からは、

【期待】

- 定型業務（字幕・画像生成・下書き・データ整理）を効率化し、生まれた余力を取材や企画など「人間にしかできない質の高い番組制作」に投入できることに期待している。
- AI には制作者に気づきの機会を与える「思考のパートナー」の役割を期待している。
また、蓄積された利用履歴から、見落としていた論点の発見などに活かしてほしい。

【不安・懸念】

- ハルシネーションやデータの偏り、フェイクニュースを基にした誤報によって、テレビが信頼性を損なうリスクはないのか。人権やプライバシーへの影響に不安がある。
- AI に頼りすぎること、番組が画一化されることはないのか。また、手軽さゆえに取材が疎かになったり、情報の質が下がったりしないかと懸念している。

【要望】

- 利用規定やルールを策定・遵守しながら、あくまでも「人間が主体であること」を前提に、最終的な確認は人が負うことを徹底する必要がある。
- 技術革新をチャンスと捉え、既存の手法を含めた幅広い選択肢から人が主体的に AI を活用することが肝要だ。

これらに対して、KBC の担当者からは、

- AI 活用の狙いは、業務を効率化により良質なコンテンツ制作に繋げること。現在、報道部門ではプレスリリースの要約や要点の分析に活用している。

- 誤情報やフェイクニュースに惑わされることがないように、発信者や関係先、当局への確認（裏どり）を徹底し、真偽を見極めた上で報じるかどうかの判断をしている。
- 人権などへの配慮は不可欠であり、入力した情報が外部に漏洩することがないように、入力した内容がAIの学習に使用されない「閉じられた環境」を使用している。
- 記者の取材力が低下しないように、原稿作成の場面では積極的にAIを活用していない。特に新人の記者などには、自分で確かめて原稿を書くように指導している。
- 番組制作の現場に限らず、AIを活用したあらゆる業務プロセスの最終ラインに必ず「人」の確認や判断が存在するようガイドラインを整備している。

などの説明を行いました。

「論点2」について委員からは、

【信頼性・価値】

- 偏った見解が多いネットの情報に対して、テレビには丁寧な取材と確実な裏取りを経て、虚偽のない正確な情報が届けられているという信頼がある。
- 情報が氾濫し真偽判別が難しい時代だからこそ、災害時などの場面で安全・安心の拠り所となる情報を提供することが今後の価値に繋がると思う。

【責任】

- SNSの速さや拡散力に惑わされず、放送倫理に基づく編集と検証を重んじ、「遅くても正しいこと」「深く伝える・考えさせること」を全うすることが重要な責任だ。
- 単なるガイドラインの策定にとどまらず、次のプロセスに進むための行程を構築する必要がある。視聴者との信頼関係の土台となる人材育成にも力を注がなくてはならない。

【要望】

- 都合のいい真実の切り取りや報じない自由によるテレビ離れを反省し、「なぜ報じるのか、あるいは報じないのか」を誠実に開示する必要がある。
- 最近のテレビで多用される「SNSで騒がれています」という表現や、ネット動画の安易な流用には懸念が多いので、事実確認を徹底してほしい。
- 地上波放送の内容をネット・SNSで配信する際は、各メディア特性を意識した「伝え方」や「かたち」を検討してほしい。

これらに対して、KBCの担当者からは、

- テレビが「疑わなくてもいいメディア」でありつづけるためには「信頼性」との言葉に尽きる。正確性や多角的な視点が今後も不可欠だと考えている。
- テレビは編集と検証を経て正確な情報をお届けしている。この強みを視聴者に「価値」として認識いただくように努めていく必要性を改めて認識した。
- 「都合のいい真実を切り取っている」と誤解されないように、多くの視聴者に納得感を得られる報道を心がけていきたい。
- 特に事件事故の報道をネットやSNSで配信する際は、デジタルタトゥーのような問題にならないよう、引き続き十分な配慮をもって取り組んでいく方針だ。

などの説明を行いました。

「論点3」について委員からは、

【役割・存在意義】

- ローカル局には丁寧な裏付け取材による正確なニュースや迅速な災害情報を届けることで、地域住民の安全と安心を支える「最後の砦」となってほしい。
- 地元の伝統行事や企業の取り組みなど、見落とすべきではない地域の魅力や課題を可視化することにより、地域の人と人とをつなぐ公共的なハブの役割を担ってほしい。
- 地域の空気感や人の思いを届けることは人間にしかできない。長期間の取材や丁寧な構成を通じて地域の文脈や人の思いを描き出し、地域の瓦版として機能してほしい。
- ローカル局には距離の近さという強みがある。「KBC であれば取材を受けても構わない」という強固な信頼関係から得られる情報は価値があると思う。

【今後に向けた提言】

- KBC が取り組む「ふるさと Wish」や「防災パートナーシップ協定」に加えて、「アサデス。」「ぎゅっと」は十分に地域に入り込んでいるので、ぜひ継続してもらいたい。
- AI や SNS を活用して視聴者との対話し、今後必要とされる番組を提供しつづけてほしい。地域の文化や背景・歴史を理解し、地域の価値を世界や未来へつなげることも重要な役割だと思っている。

これらに対して、KBC の担当者からは、

- 「信頼できる地域情報の砦」「地域コミュニティのハブ」という役割も KBC の存在意義を示すためには大事なものだとして認識した。
- 地域に根差す地元メディアとして、一時的な取材や単なる情報発信にとどまらず、背景も含めて深く丁寧に理解して、継続的に伝えることが重要なのだと改めて受け止めた。
- 「地域の空気感」や「人の思い」を伝えることは人にしかできない。AI を活用しながらも、人の強みを生かしつつ、地域に信頼される番組制作を目指していきたい。

などの説明を行いました。